

(別紙 2)

## 審査の結果の要旨

氏名 新田 昌英

日常の平凡なことがらを、身体感覚を土台に鋭く書き綴ったエッセイストとして日本でも人気の高いフランス人作家アラン（1868-1951）は、第三共和制という時代の学問・思潮の文脈の中で、どのようにしてその一見平明に見える文体を練り上げたのか？ 筆者は、アランが「情念」を中心的な主題としていることに着目、19 世紀後半、実験心理学の発展とともに忘却されたこの概念を、なぜアランが自分の思考の中核に持ち込んだのかと問いかける。本論文は、デカルト以来の伝統ある情念論が、実証的な心理学研究の登場で色褪せた時代に、アランがこの言葉を独自の生氣ある概念として蘇らせ、独自の文章世界を作る過程を丹念にたどった論考である。

全体は四部構成。第 I 部で、筆者はフランスにおける情念論の歴史をたどり、さらに 19 世紀末以降大きく発展した実験心理学を調べ、アランの情念論が書かれた時代状況を明らかにする。第 II 部では、情念をめぐるアランの思想の発展段階を、初期の知覚論から 1917 年の『精神と情念に関する 81 章』、さらに第一次世界大戦後の『プロポ』まで精査、始めは主題化されていなかった「情念」が、ある時キーワードとして浮上することを指摘、その空白を埋める文献として「感情の哲学」（1911 年頃）という草稿がパリ国立図書館にあることを突き止める。第 III 部で、筆者はリボー、ビネー、ジャンネなどによる実験心理学の発展と、それに対するアランの態度を検討、アランがさまざまな症例に興味を引かれながらも、実験心理学という学問の枠内では、生理的なものと心理的なものをつなぐ「傾向」という概念で症例が分析されていることに反発していたことを例証する。この作家は〈自我〉と〈宇宙〉を一体とみなすような独自の世界観をいだいていたために、生理／心理の二元論を退け、恐怖、悲しみ、喜びのような「情念」という現象にこそ、心身合一的な側面から人間を見つめ直す機会を見出していた。第 IV 部は、こうしたアランの思想展開・解明の鍵となる「感情の哲学」の精読に捧げられている。筆者がパリ国立図書館で草稿から転写した活字原稿は、独立した冊子として本論考に組み込まれている。

審査では、文章の明晰さ、論考の確かさ、実験心理学と文学との関係という基本文献さえまだ出そろっていない未開拓の研究領域に果敢に飛びこんで行く姿勢が高い評価を受けた。「感情の哲学」の翻刻と、この草稿に関する分析は、ただちにフランスのしかるべき研究機関で発表すべきであると促す声が複数上がった。アランがカントの影響を大きく受けていたという発見、スピリチュアリズムと実験心理学の対立が 19 世紀末のフランスで作らだしていた文脈の掘り起こしなど、本論考は数々の創見に満ちている。初期知覚論をめぐる議論に多数の論点が凝縮されていて理解しづらいところがあるが、この論文の価値をゆるがすものではなく、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。